

「おうちで読み聞かせ」 に向いている本

今回のブックリストでは学校や図書館での大勢の読み聞かせには向いていないけれど、おうちでの読み聞かせに向いている本をご紹介します。

絵が遠くまで見えず文字が多くても楽しめる本はたくさんあるので、ぜひおうちで子どもたちにゆっくり読んであげてください。

幼児から

上段：内容 下段：おすすめ、読み聞かせポイント

おやすみなさいのほん

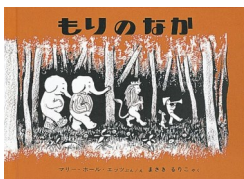


マーガレット・ワイス・ブラウン／文
ジャン・シャロー／絵
いしいももこ／訳
福音館書店

夜になると、小鳥、魚、羊、森のけものも、カンガルーもみんなねむります。もちろん生きものばかりではなく、自動車や飛行機だってねむります。子どもたちもおいのりして、さあ、おやすみのじかんです。

子守唄のように快い繰り返しのフレーズに様式化した図柄に柔らかな彩色した絵の心安らかに眠りの世界へと誘います。リズムカルな言葉と温かい絵。すやすやと眠る我が子の顔を見る幸せな時間。静かな声で読みたい本です。

もりのなか

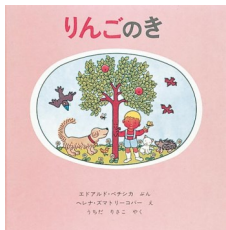


マリー・ホール・エッツ／文・絵
まさきりこ／訳
福音館書店

ぼくがもりのなかをおさんぼしていると、らいおんも、ぞうも、くまも みんなぼくについてくる。みんなもいっしょについてきて！

一見地味ですが、子どもの頃読んでもらって大好きだったという声をよく聞きます。子どもと一緒に絵を見ながら、静かにゆっくり読んでください。

りんごのき



エドアルド・ペチシカ／文
ヘレナ・ズマトリーコバー／絵
うちだりさこ／訳
福音館書店

マルチンは小さな男の子。家の庭にあるりんごの木は、冬には一面の雪に埋もれていたのに春には花を咲かせ、秋にはりんごが実ります。マルチンは家族とりんごの木を世話しながら、実がなるのを心待ちにします。

絵をよく見ると、季節の変化に気がきます。子どもたちも身近な自然に目を向けるようになるといいですね。本のサイズが小型なので、自分で持ちやすく、ページをめくっているうちに読むことにも挑戦するかもしれません。

こぎつねコンチ



中川李枝子／作
山脇百合子／絵
のら出版

こぎつねコンチは、きつねはらっぱの近くに住んでいます。
春・夏・秋・冬の一年を通して季節の移り変わりの中で営まれる、幼い子どもとお母さんの豊かな生活を描いた、ほのぼのとする12のお話です。

季節ごとのコンチの家族の生活のやり取りの温かさを、一緒に感じることができます。コンチが様々な経験をしたり、そんなコンチを見守るお母さんの愛情が、会話の端々からあふれてこちらまで優しい幸せな気分になり、素敵な時間を過ごせます。親子で好きな場面を見つけましょう。

とうさん おはなしして



アーノルド・ローベル／作
三木卓／訳
文化出版局

七ひきの子ねずみたちにせがまれて、とうさんねずみはひとりに一つずつおはなしをします。ねがいごとをかなえてくれるいどのはなしや、かあさんねずみに会いに歩きつづけるねずみのはなし。お父さんがぜんぶはなしおえたときには、ちびねずみたちは、もうぐっすり…。

七ひきの子ねずみの分、七つのはなしが聞ける作りになっていて、面白いです。短いけれど奇想天外で愉快な物語がたくさん。ローベルの挿絵と共に楽しめます。全てを読まなくても、七つの内のひとつでもお子さんのお気に入りを見つけて何度でも読んであげてください。

低学年から

あのね、わたしのたからものはね



ジャニス＝メイ＝ユードリイ／作
エリノア＝ミル／絵
かわいともこ／訳
偕成社

一年生のメアリイ＝ジョーは友達の前で話すのが苦手な女の子。毎朝クラスでは誰かが自分の宝物の話をするのですが、恥ずかしがり屋のメアリイ＝ジョーはみんなの前で大きな声を出して話をするのができません。今日こそはと考えているのですが…。ところが、ある晩とてもいい考えが頭にひらめきました。そして、初めてみんなの前で自分の宝物の話を始めました。メアリイ＝ジョーの宝物とは何だったのでしょうか？

短いストーリーの中に主人公の心の動きや思い悩む様子が克明に描かれています。いつも身近に存在する家族について目を付けた感動的なお話です。親子で自分の幼かったころの体験談を話すのもいいですね。

エルマーのぼうけん



ルース・スタイルス・ガネット／さく
ルース・クリスマン・ガネット／え
わたなべしげお／やく
福音館書店

エルマーは男の子。のらねこから、かわいそうなりゅうの子の話を聞いて、りゅうの子を助けるため、どうぶつ島に行くことにします。のらねこは、持っていくものとどうぶつ島のことも全部教えてくれました。エルマーのぼうけんが始まります。

エルマーがピンチになるたびに持っていったものに助けられるので、子どもは、持ち物のページや、本の見返しの地図も確認したがります。地図は読後も見て楽しめます。おはなしがとても面白く、自分で続編を読み始める子もいます。（続編『エルマーとりゅう』『エルマーと16ぴきのりゅう』）

けしつぶクッキー



マージェリー・クラーク/作
モウドと ミスカ・ピーターシャム/絵
渡辺茂男/訳
ペンギン社

いたずらなアンドルーシクは、カチューシカおばさんから市場に出かけるから、焼きあがったばかりのけしつぶクッキーのみはりをお願いされましたが…。

優しい語り口調で、声に出すと耳に心地よく響いてきます。さらにピーターシャム夫妻による明るくて愉快的挿絵が目を惹きます。主人公の幼い男の子・アンドルーシクとカチューシカおばさんとのちよっぴり不思議な1日の出来事を、親子で楽しんでください。

すずめのおくりもの



安房直子/作
菊池恭子/絵
講談社

ある朝、とうふやさんの店先にたくさんのすずめたちが訪ねてきて、小さい豆腐を一丁、注文しました。今年すずめ小学校に入学する25羽の子すずめたちに、ごちそうを作ってあげたいと言うのです。とうふやさんは、びっくりしながらも、すずめたちの願いを聞いてやりますが…。

正直でひとのいいとうふ屋さんすずめたちのやり取りが、何とも言えずおかしくて、かわいい! 一見古い本ですが、絵もあたたかみがあり、声に出して読むと、楽しさと味わいが倍増します。ぜひお家で大人が読んであげてください。

中学年から

月夜のみみずく

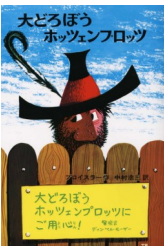


ジェイン＝ヨーレン/詩
ジョン＝ショーエンヘル/絵
くどうなおこ/訳
偕成社

ある冬の夜、女の子はお父さんとみみずくに会いに出かけます。一面の雪景色、そして美しい言葉のリズムと共に物語は進んでいきます。静寂の中、ホ、ホ、ホとみみずくを呼ぶ声だけが響き、そしてついにみみずくに会うクライマックス!

読者までが、まるでみみずくに会えたようなそんな気分になります。静かな冬の夜、是非、親子で楽しんで欲しい絵本です。

大どろぼうホッツェンプロッツ



オトフリート＝プロイスラー/作
中村浩三/訳
偕成社

カスパールのおばあさんの大事なコーヒーひきが、大どろぼうホッツェンプロッツに盗まれてしまいます。カスパールは、友達のゼッペルと一緒にコーヒーひきを取り返そうと作戦を考え、まずは、ホッツェンプロッツのかくれ家をつきとめようとしてします。

ホッツェンプロッツに、カスパールとゼッペルが子どもながら、知恵を働かせて挑んでいくところに、子どもたちは夢中になります。一章が10ページぐらいですので、読み聞かせしやすいです。続編をそっと置いておいたら、自分で読み始めるのではないかと思います。(続編『大どろぼうホッツェンプロッツふたたびあらわる』『大どろぼうホッツェンプロッツ三たびあらわる』)

ふたりのロッテ



エーリヒ・ケストナー／作
高橋 健二／訳
W・トリヤー／絵
岩波書店

瓜二つのそっくりな双子、ロッテとルイーゼは別れた父と母の元で別々に暮らしていましたが、偶然行った先のサマースクールで出会ってしまったのです。2人はお互い覚えていない父や母に会いたくなり、サマースクールの帰宅時に入れ替わりを決行します。単に姿を似せるだけでなく、クラスメイトや近所の人、家の中の物の置き場などの情報を出し合っています。

ケストナーは映画などのシナリオも手がけていたこともあり、見ているあるいは読んでいるであろう読者を想定し、読者に向かって語りかけるのがとても上手いので、導入の部分からスーッと引込まれていきます。

ルドルフとイッパイアッテナ



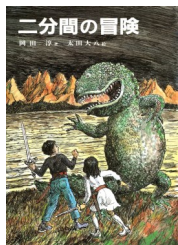
斉藤洋／作
杉浦範茂／絵
講談社

ねこのルドルフは、ひょんなことから知らない町まで来てしまった。そこでルドルフは、その町のボス猫に出会う。「おれの名まえは、いっぱいあってな…」

黒ねこのルドルフは、魚屋から逃げ、トラックの荷台に飛び込み、東京でトラねこのイッパイアッテナと出会います。ルドルフが経験の中で成長していくのが面白く、細かい章で読み進めやすいです。

高学年から

二分間の冒険



岡田淳／著
太田大八／絵
偕成社

6年生の悟は、クラスメイトと明日の映画会の準備をしていたが、作業にあきて体育館を抜け出した。その時どこからか、「おまえ、いいものもってるじゃないか」という声が響いてくる。見回すと、そこには一匹の黒ねこがいた。黒ねこと不思議な対話をしているうちに、悟は突然、異世界に引きずり込まれ、難題を解決する旅が始まる。

学園ものに異世界冒険ファンタジーがプラスされた、どんどん読み進めたいくなる物語。毎日15分くらい読み聞かせするのも向きます。壮大なストーリー展開に、読み手も聞き手も大きな達成感が味わえます。

魔法使いのチョコレート・ケーキ



マーガレット・マーヒー／作
シャーリー・ヒューズ／画
石井桃子／訳
福音館書店

悪い魔法使いだと誰も寄り付かなかったひとりの魔法使いがいました。この魔法使いは、チョコレートケーキ作りが得意で、リンゴの木が唯一の友達でした。時間が過ぎたある日、招待状を見てとうとう子どもたちがやってきます。魔法使いと子どもたちとの交流を描きます。

表題の「魔法使いのチョコレートケーキ」の他に7つのお話と2編の詩が収められているマーヒーのお話集です。身近な風景の中に不思議な魔法の世界へ案内してくれる、大人も楽しめる本です。切なさの中に読み終わった後、何とも幸せな気分になるお話です。